

## 《母の小指と、約束の指輪》

クリスタリウムの北側に位置する「博物陳列館」――。

ようこそ、お待ちしております。ここには、この地に生きた人々の歴史を綴る偉大なる書物たちが眠っています。

円柱状の壁面には、所狭しと様々な書物が並び、螺旋階段に包まれるように中央の空間にも同様に円柱状の本棚が配置され、こちらにも数多の歴史書が鎮座しているようです。

その螺旋階段を最上層まで登っていくと、円形のフロアに辿り着きました。乱雑に積まれた書物、それとは対照的に柵沿いに整然と置かれた机と椅子。それらを照らすのは、小さい傘を被った淡く光るランタンたち。

仄暗い館内を見渡すと、書庫には似つかわしくない一際大きな円形の機械が置かれています。その前に腕を組みながら、顎に手を当てて佇む男の名はモーレン。クリスタリムの顔役の一人であり、博物陳列館の司書という人物です。

「ああ、よくぞいらっしゃいました！今日は復習ですか？それとも何か、新しい学びを…？」

彼は大仰に挨拶をすると、1冊の本を取り上げました。こちらの要望を聞きながらすでに本を拾い上げていた様から、モーレンはすでに聞かせたい話があったのかもしれませんがね。

「あなたもご存知の通り、ここはあらゆる書物を蒐集し、保管する場所です。そしてつい最近、また新たな物語が発刊されました。この物語を、ぜひあなたにも……」

しかし、差し出された本をヒョイと翻すと、芝居じみた大仰な仕草で一礼してみせるモーレン。口元は本の背表紙の様に緩く弧を描き、それは決して不気味さを湛えるものではなく、これから始まる物語に胸を躍らせるかのように優しい表情でした。

「ああ、しかし！ただ黙読するのでは味気ないですね。いやいや、そんな乙な時間も甘美ではありません。ただ、今回の物語の主人公は……あなたを敬愛するアリゼー女史。彼女のアンビバレンスな想いと、ジレンマと闘う真珠の様な真っ白な心をぜひ赤裸々に知って頂きたいのです。今回は少し趣向を変えて……この物語の「アドボカシー」をお呼びしましょう」

アリゼーの物語であれば、アリゼーの口から語らせれば事足りるでしょう。しかし、そのセオリーすら今回は変えようというのがモーレンの提案のようです。

「アドボカシーとは代弁者……引いては、この物語の朗読者といったところでしょうか。ハンナさん！こちらへ来て頂けますか！」

「……こんにちわ。ああ、あなたが噂の……。モーレンさん、今回はどんな物語を？」

ハンナと呼ばれた女性は柵沿いの椅子に座っていました。

落ち着いた声音は、低すぎず高すぎず、整っているという表現が正しいでしょう。

たった一言挨拶を交わすだけで、耳心地が良く、彼女の声は聴かせるために訓練された声なのだということが分かります。

読んでいた本をトン……と静かに閉じると机に置きました。

ゆっくりと立ち上がり、降ろされた長い髪を、カーテンを束ねるように綺麗に耳の後ろに掻き上げる。そのシュールブラウンに染められたサラサラのストレートヘアは長く、背中の肩甲骨の辺りまで伸びています。

モーレンと同じノフィカグリーンが溶かされたカウルを着ており、フードは外されていますね。スイートブラックのインナーにはシャインゴールドの刺繍が施されている。これが博物陳列館の制服なのかどうかは定かではありません。

手にはピュアホワイトの手袋をしていて、本を汚さないようにという気遣いが見て取れます。

そして、立ち上がると同時にリン……という鈴のような音が響き渡った。その音の正体は何か分かりませんが、彼女が1歩踏み出すごとに鳴るので、ここではあえて「足音」がすると記しておきましょう。

モーレンは彼女のその足音を気にも留めずに迎えたのでした。ハンナも、自分がこれからすることを理解しているようです。

「こちらがハンナさんです。彼女は朗読者として一流の読み手ですので、ご安心ください。……さて、どんな物語かどうかは、あなたの朗読次第ですよ。今回も期待していますね、ハンナさん」

「これは新刊ですね。しかもとても最近。書き手は……ああ、アリゼーさんの」

「…そうです！舞台は、かの「光の氾濫」を食い止めた過酷な大地アム・アレーン。あなたが訪れる少し前の出来事のような……。そこでアリゼー女史が見た世界とは、一体何だったのでしょうか。果たしてこの物語は本当に、小指をめぐる凄惨な事件だったのでしょうか……いいえ、きっとこれはストルゲーです。

この地を支配していた大罪喰いの名がそうであったように。タイトルは「母の小指と、約束の指輪」

「……いいえ、モーレンさん。きっとこの指輪の読み方はおそらく……Word rings。一体どんな言葉が刻まれているのでしょうかね。私も読むのが楽しみです！」

「ええ、ええ！さすがはハンナさんです。では、あとはハンナさんにお任せしますね。どうぞ、お好きな席でごゆっくり。ああ、一つだけ……ハンナさんは時に、不思議な謎掛けをしますのでご注意を」

「ふふ。真実の中に隠された、ほんのヒトカケラの嘘を……。あなたは気づいてくれるのでしょうか。私は美しい物語の中にも、あったかもしれない小さな真実は存在するのだと思っていますから……」

モーレンは一つ微笑むと、不思議な球体の機械がある場所へ戻って行きました。

この場所はさほど広いスペースではありません。きっとハンナの朗読はこのフロアにいれば聞こえてしまうでしょう。

つまり、モーレンも観客なのです。

そのことを理解しているハンナはモーレンを一瞥した後、受け取った本をめくり始めました――。

「それでは、始めましょう。母の小指と、約束のワードリングス」

舞台はアム・アレーン。ノルブラント南部に広がる砂漠地帯。かつて、光の氾濫を防いだ場所として名高く、今でもなお光の脅威にさらされている土地。

そして南端には、光の氾濫により飲み込まれた国家ナバスアレーンの城が眺望出来ます。

そんな荒涼とした砂漠地帯に訪れたのが、アリゼーさんでした。この物語は、あなたがアム・アレーンを訪れる少し前のお話です。アリゼーさんは、眼前に広がる無の大地を望み、一体何を思ったのでしょうか……。

遠く、寂しそうな視線からはおよそ誰かにというよりも、この世界に憂いを馳せている……そのようにも見えます。

その視線がゆっくりと下へ向けられると、何かに吸い寄せられるように目を釘付けにされました。

「こ、これ……指っ……？」

砂の上にまるで煌めくヒトカケラのビーズを落としたかのように、細くしなやかな、命の鼓動すらしない指が一本、横たわっていたのです……。

その細さ、長さ、形を見るとそれは小指に近いようです。大人のものか、子どものものか、果たして右手なのか左手なのかは定かではありません。しかしそれが、小指であることはアリゼーさんも得心がいったようでした。

「小指が、何でこんなところに……。ええと、右手の方……よね？ しかも、腐食もしてないってことは防腐剤かしら……。一体誰の……？」

拾い上げた小指を手のひらに包みながら、アリゼーさんは風に誘われて見上げた視線の先に「旅立ちの宿」を望んでいました――。

始まりは、温もりを無くした誰かの小指。荒れ果てた大地は、虚しさを漂わせる風は、アリゼーさんに何も教えてはくれませんでした。

だからアリゼーさんは、自ら歩みを進めることにしたのです。

向かう先は「旅立ちの宿」……。

特殊なエーテル魔法を施してからその小指をポケットにしまい、アリゼーさんは何かを決心したような面持ちで歩き始めました。

「こんにちわ、番兵さん。ちょっといいかしら」

「ん？ 旅の者か？ この中には特に珍しいものはないぞ」

「ああ、いいの。私、水晶公の客人……と言ったらいいかしら。

ちょっとこの辺りのことを知りたくてね」

「そうだったのか……。ここは「旅立ちの宿」といって、光に侵されてしまった人たちが一時休む場所さ。何の持て成しも出来ないが、水晶公の客人とあれば中で話くらいは聞いてくれるだろう」

「光に……？ どういうこと？ ここは宿と言っても宿泊施設じゃないの？」

今ではあなたも、この世界の理について理解しているでしょう。

しかし、初めてこの世界に来たアリゼーさんにとってそれは、耳馴染みの無いものでした。光に侵されたという通じる話は、この第1世界に限っての事なのです。

「ん？ ああ、そういうことか。悪いがその辺のことは、俺よりも中の人の方が詳しいだろう。内情を知る人の方があんたに分かるように説明してくれるぜ」

「そう……分かったわ、ありがとう。一先ず……誰と話そうかしら。ここに宿長みたいな人はいる？」

「それならコハルさんに……って、もうあの人は居ないんだったな……。すまねえ。テスリーンという女性を探してくれ。まだここへ来てそう長くはないが、あんたと年も近そうだし、話しやすいだろうぜ」

「……テスリーンね、了解したわ。それじゃ」

コハル……この名前をアリゼーさんが知るのはもう少し先の事。

今はまず、テスリーンを探しましょう。アリゼーさんは気にしつつも、番兵に礼を言ってから「旅立ちの宿」に入っていました。

番兵の表情はどこか寂しそうな表情でアリゼーさんの背中を見送ると振り返り、光の氾濫により瓦解したナバスアレンの北方守護城「カスール・シャル」を眺め、目を細めます。

かつての賑わいが、たった一つの出来事で失われた大国の郷愁。彼はひよっとしたら、故郷への哀愁を、コハルという名前に重ねていたのかもしれないね。

旅立ちの宿に眠る、コハルという女性。それは皆の支えであり、母であり、笑顔の中心にあった愛しさを、たった一つの出来事で失ってしまった彼らの傷は遠く見上げた空が癒してくれることは無いでしょう。

番兵は乾いてしまった目元をもう一度潤ませながら、静観な表情になり右手を優しく握ってから、開くような仕草をしました。

彼にしか見えない何か、そこにはあるのでしょうか……。

「おや、新顔だね。道に迷ったの？」

「私はアリゼー、お邪魔してるわよ。テスリーンという女性を探してるのだけど、あなたのこと？」

「いいえ、私はカッサーナ。ここ「旅立ちの宿」の世話人の一人……患者たちの身の回りの世話をするのが役割よ。テスリーンなら、何か探し物をするという出かけているけれど……。

あなたは旅人さん？ どうしてテスリーンを……？」

「……ええ。水晶公の客人なの。さっき、番兵さんに教えてもらったのよ。ココのことを知りたいなら歳が近そうなテスリーンという女性を探してみろって。コハルという女性はまだ居ないそうね」

初対面であれば、お互いに警戒するような物言いになるのは仕方のないことでしょう。アリゼーさんはさりげなく、彼女の指を観察しました。もちろんカッサーナにも小指は健在です。

先ほどの番兵も戦闘職とはいえ、指を落としているということもありませんでした。

ここが宿でありながら、活気が溢れているという様子とは程遠いようですね。それに、患者という単語。宿とは名ばかりで医療施設に近いのかもしれないと、アリゼーさんは漠然と考えていました。

「あの人、まだ……。アリゼーさん、テスリーンがいつ戻るか分からないから良ければ私が説明するよ。このことを知りたいの？」

「ええ、助かるわ。あなたもさっき、患者って言っていたけれど、ここは宿泊施設ではないの？」

「ええ違うわ。……っと、どこから話せばいいかな。ここはね「宿」なの。患者にとっての、一時足を止めるだけの場所。だって、最後には「旅立つ」しかないのだから……。だから「旅立ちの宿」よ。昔は「療養所」なんて呼ばれていたらしいけど……いずれ本当の意味でその名前に戻れば、と思うわ」

「旅立つって……あの患者たちは、一体どんな病に掛かっているの？ 番兵さんは、光に侵されたって言っていたけれど、どういうこと？」

「ノルブラントの地の大部分が光の氾濫によって浸食されてしまったのは、水晶公から聞いている？ そして無の大地より沸き出た罪喰いという得体のしれないものが、私たちを脅かしている……。そんな罪喰いたちに襲われながら、かろうじて生き延びた人たちがこの患者なの。あの人たちは一応命は助かったけれど、敵の光の力が強すぎて体の中まで光に浸食されてしまった。あの大地の様にね……。本来であれば自然と体調を整えられるけれど、もう彼らを受け入れてくれる場所は無く迫害されてここにやってきたの。この乾いた大地はそんな彼らを温かく迎えてくれるわけもなく、浴びるがままに光を蓄えてしまう病気なのよ。遅かれ早かれ、みんな罪喰いになってしまうの……」

「普通の人なら自然とバランスを整えられるけれど、彼らは体内のエーテルまで光に侵されてしまったから、浴びるがままに光を蓄え続けてしまう。そしていずれは溢れて、罪喰い化してしまうのね……」

「そう……。私も最初はね、兄を引き取ってもらうために来たんだけどコハルさんや、この人たちにとってもお世話になって……。彼が旅立つまでって思っていたんだけど、滞在してるうちにね……皆は私にとって「家族」になっていたの」

「家族、か……」

アリゼーさんの憂いは同じ兄を持つ者として共感と、もしも自分の兄が罪喰い化してしまうことになんてなってしまうたら……と恐怖せずにはいらませんでした。ここに生きる人たちは、もう死を待つかありません。大切な人が、罪喰い化して誰かを襲ってしまうことほど悲しいことは無いのですから。その矛先が自分に向けられるなど、誰も想像したくはないでしょう。

「じゃあ、罪喰い化する前に何か手立ては無いの？ ひょっとしたら何か治す方法だって……」

「罪喰い化を治すだなんて、軽々しく言っていていいことじゃないわ。下手な希望は、周りを危険にさらすだけよ」

「それは、そうだけど……」

「ごめんなさい、今日来てすぐに理解するのは難しいよね。ただ、最期には…あ、戻ってきたみたい。おかりなさい！ テスリーン！」

難しい顔をしたテスリーンが、番兵のいる方角から帰ってくるのが見えました。カッサーナが大手を振って迎えます。アリゼーさんも振り向き、ようやくテスリーンに出会うことができました。

待ち人來たる。乾いた風に載せて、デザートイエローの長い髪が揺れています。頭頂部にはスノウホワイトのヘアバンドを身に着け、ふとももの横に携えられた懐剣が一つ……。深く悲しいオサードブルーの意味を、アリゼーさんは知る由もありません。テスリーンの涙はすでに二粒、落ちていたのです。

「ただいま、カッサーナ。ごめんね、探し物をしてて……こちらの方は？」

「水晶公の客人で、アリゼーさん。あなたを紹介されてきたそうよ。このことについて色々話していた所なの。居ないと思ったら、……また探し物をしていたの？」

「そう。クリスタリウムからのお客さんなんて珍しいね。よろしくお願ひします、アリゼーさん」

「アリゼーでいいわ。あなたがテスリーンね、少し時間を頂けるかしら」

「ええ、いいですよ」

「それじゃあ、私はこれで失礼するよ。ゆっくりしてってね、アリゼーさん」

「ありがとう、助かったわ。カッサーナさん」

カッサーナは去り、テスリーンと二人きりになったアリゼーさん。ここで二人は、お互いのことを話し合い、理解し合いました。

番兵の予想通り二人は意気投合し、この世界のこと、あちらの世界のこと、旅立ちの宿の事、世話人のこと。たくさんのお話を語り、カッサーナが話してくれたことを通して、さらにアリゼーさんはこの世界の過酷さを知ったのです。

それならば、と……。どちらからともなく、用心棒という話が持ち上がりました。腕に覚えがあるアリゼーは修行の為、そしてこの地をもっと深く知るためにテスリーンの用心棒になることを決めたのです。

こうして、アリゼーさんはしばらく「旅立ちの宿」に拠点を置くことになりました。そんな意気投合したその日の夜、といっても空は明るいままですが……。まるで白夜のようなこの世界での夜の時間帯に、歓迎会と称しささやかながら夕飯を共にしようという話が持ち上がりました。

アリゼーさんは小指探しの一件もあり、世話人や番兵も含め一同が介すこの機を幸運に思いました。誰かの持ち物ならば返してあげたい、この人では無いのなら誰かの悲しい出来事があっただけ……。そう思える為には、今夜の歓迎会は出席しなければなりません。アリゼーさんは快諾すると、改めて内側の案内をテスリーンにお願いしたのでした。

その時、黙して静かな視線が一つ。二人の影を追ったのを、彼女たちが気づくことはありませんでした。

その瞳は陰り、光に侵されているとは皮肉な眼の色をしている少年がそこにいました。彼もまたこの患者です。頭部の左右から垂れるのはアウラ族の象徴ともいえる誇り高き角。皮膚の一部は硬質化した鱗。そして覇気の枯れたように垂れさがる尻尾。

はたから見れば、他の健康なアウラ族とそう変わりありません。しかし少年は何も語ることは無くなってしまったのです。力なく垂れさがった腕の先を見ると、彼の小さな手はまるで何かを握っていたかのように、緩く閉じられていました。

「……やっぱり慣れないわね。これが、この世界の……」

あれから数時間が経過しました。本来であれば、陽が落ち月が顔を出す頃合いです。この世界はまだ煌々と大地を光が照らしています。とある書物には、マジックアワーというとても煌びやかな夕暮れがあると書いてありましたが、ここではまだ見ることは叶わないでしょう。

そんな愁いを帯びた表情のアリゼーさんは、旅立ちの宿の中央にあるエーテライトの青光に淡く照らされていました。炊事担当のラモンを初め、テスリーンやカッサーナたち世話人も様々な料理を作っている所です。

おや……。ぽつんと佇んでいるアリゼーさんを見つけて、一人の世話人が話しかけてきました。

「やあ、旅人さん。名前は、アリゼーさんだったかな。俺はウィルフォート、ここで患者のお世話をしてるんだ。よろしくな」

「どうも。あなたもこの世話人なのね。私のことはアリゼーでいいわよ」

アリゼーさんは、つぶさにウィルフォートのことも観察しました。どうやら彼の小指も健在のようですね。観察が終わると、また別の人の観察をしようと視線を彷徨わせるアリゼーさん。

「アリゼーは、誰かを探してるのか？」

「あ、いいえ。やっぱり、ここにいる人たちはあんまり人数は多く無いのだと思ってね。患者はどのくらいいるの？」

「今は10人程度だ。しかし、いつまた増えるかもわからないし、そのうち旅立つ人もいるだろう。そうして何度も俺たちは迎え入れ、旅立ちを見送るのさ」

「そう……。やっぱり、光に侵される人は後を絶たないのね……」

「ああ。例えば、あそこで横になっているヒュムの男性、見えるか？ 身体を丸くしてるから分かりづらいが、俺よりも背の高いんだ。名前はバーニルさん……。元々はこの世話人で俺の先輩だった。気さくな人で、俺にも色々世話人のことを教えてくれたよ。ただ、ある事件が起こって、直接大罪喰いの光に当てられちゃった」

「……事件？」

「悔やんでも悔やみきれない事件さ。この誰もが知っていて、この誰もが涙を流した。一度に三人も光に侵されてしまったんだからな……」

「そんなに……。護衛はいなかったの？」

「もちろん居たさ。バーニルさんたちはモルド・スークまで行くところだったんだが、モルド・スークまではある程度の距離がある。あの場所に行く時は必ず番兵が一人つくことになってるんだ。その時護衛に就いてたのが……。ほら、あそこに座ってる眉間に傷があるガルジェントの大柄な男だ」

「彼は……。もともと番兵だったのね」

つまり、この意味することはお分かり頂けるでしょうか。罪喰いの狩りは、無差別であり無作為。そして局地的であり全域的。遠くクリスタリムで襲われることもあれば、当然アム・アレーンの地こそ危険なのです。

彼方で光に侵された人ばかりが、旅立ちの宿を訪れるわけではありません。この世界にいる限り、それこそアム・アレーンにいる限り、世話人であろうと番兵であろうと罪喰い化する恐れを孕んでいるのです。それこそが、第一世界を蝕む恐慌……。

「番兵の彼らは、それを承知でこの場所を守ってくれている。いつかまた罪喰いがやってくるかもしれない、その時自分自身も襲われてしまうかもしれないが、患者や世話人を守るために俺は自ら選んでこの場所にやってきたと彼は言っていた。トッデン……彼もまた、身内が罪喰いに襲われて悔しくて入隊したと言っていたな。俺は同じガルジェントとして、トッデンを誇りに思ってるよ。彼の旅立ちは俺が必ず見送るさ」

今はもう言葉すら話せなくなってしまったトッデンは、呻きながら己の無念を悔いているのでしょうか。表情は硬く、鋭い眼光は遠く誰かを見つめているようでもありました。

ふと、手元を見るアリゼーさん。トッデンにはしっかりと小指が付いています。バーニルは丁度反対側に手があって、アリゼーさんの位置からは付いているかどうかは分かりませんでした。

いえ、付いているという表現自体が違和感ですが、アリゼーさんは欠損している小指という前提のもと考えていますので、もともとあるものではなく欠けてしまった、もう一度繋ぎ合わせなければならないもの、というイメージですね。

果たしてそれは、もう一度繋ぎたいと思っているのはアリゼーさんだけなのでしょう。繋がないといけないのは、小指だけなのでしょう。

あなたはこの小指には、どんな意味があると思いますか……？

「それからもう一人、罪喰いに襲われた少年がいた。それが今、食卓の椅子にお行儀よく座っているドランの彼さ。名前はハルリク。元々大人しい子なんだけどな、母親の小指を掴んでるような甘えん坊だった。彼のことは……そうだな、テスリーンから聞いた方がいいだろう。テスリーンがよく気にかけていた子なんだ。俺から言えるのは、ハルリクのお母さん……コハルさんのことだ。この旅立ちの宿を立ち上げ、誰からも慕われる、世話人長だったコハルさんが、あの事件の唯一の犠牲者なんだ」

「え、コハルって……犠牲者……？」

「お待たせしやした！ 皆さーん！ 食事の準備が出来ましたので集まってくださーい！」

おや、威勢の良い声が聞こえてきましたね。装飾が煌びやかなスイートブラックのターバン、腕まくりをしたワインレッドの上着にサスペンダーが印象的な彼は炊事担当のラモンですね。

テスリーンたち世話人も手伝って、たくさんの料理が運ばれてきました。自力で食事が出来ない患者たちは、担当の世話人が手伝って食事をします。

ハルリクのように意思表示は出来ないものの、歩いたり食べたりすることが出来るものたちは差し出された食事を自ら口に運んでいます。ハルリクも右手でフォークを掴み、サラダを食べていますね。

賑やかな催しや、芸をする人はいません。本当に静かな食事会。いつもの食事を個々にではなく、全体で摂っているというイメージです。唯一賑やかな声があるとすれば、ラモンの料理の講釈でしょうか。

モルド・スークには珍しい食材も集まっていて、その珍味をどう料理したかや、どんな風に食べると美味しいかを滔々と話しています。その話に耳を傾けているのはおそらく、アリゼーさんくらいなものでしょう。

そんな様子を気にも留めずにラモンの料理の講釈は続いたのでした……。

「どう？ ラモンの作る料理はおいしいでしょう？」

「あら、テスリーン。あの子のお世話はもういいの？」

しばらくして、テスリーンがアリゼーさんに話しかけてきました。ニコニコしながら自分の分のスープを持ってきて、テーブルに置きます。

「うん。ハルリクは自分で食べられるから、配膳してあげれば大丈夫なの。隣、いい？」

「ええ、どうぞ」

「ありがと。おかわりはいる？ ラモンったら久々にみんなで食事だからって張り切って一杯作っちゃったの。遠慮しないでたくさん食べてね」

「ありがとう。せっかくだから頂こうかしら」

「よしきた！ そうこなくっちゃ！ ラモンー！ お話はそのくらいにして、こっちのテーブルにも料理の追加をお願いーい！」

「はい喜んでー！ あっしも同席してもよろしいでしょうかー!？」

「それはダメー！ これから二人で女子トークだから、男子聞き耳立てるべからず！」

「そいつは残念！ あっはっはあ！」

「……ラモンってきつと、気の良い人よね。ちょっと賑やか過ぎるけど」

「私は嫌いじゃないけどね、ラモンの賑やかさ。ここでは珍しいけど、一人くらい賑やかにしてくれる人がいるとみんなも息抜きって感じになって良いと思うの」

「そうね。ずっと気を張ってたら疲れちゃうものね」

その後すぐに、賑やかなラモンからサラダやスープの配膳がされました。フルーツフレーバーのドリンクセットも添えて。

「お好きなものをどうぞ、ごゆっくり」とリテイナーのような恭しいお辞儀をして、調理場へと戻っていくラモン。

先に注がれている、アップル、グレープ、オレンジ、パイナップル、ロークワット……カラフルなジュースが並べられて、テーブルの上は色とりどり、とても華やかになりましたね。

「そういえば、ウィルフォートから聞いたのだけど、テスリーンはハルリクの担当なのよね？」

「そうだよ。私が着た時から知っていたのもあるんだけど、ハルリクは……あの子は私と似ているの。だから、放っておけなくて」

「似ている？」

「うん……。甘えん坊な所とか、お母さんが大好きな所とか。あ、私もね、お母さんが光に侵されちゃってここにやってきたの。その時お世話してくれたのが、ハルリクのお母さん……コハルさん。あの人には、たくさんのことを教えてもらったよ」

「あ……事件があったそうね。3人光に侵されて、コハルが犠牲者に……」

「そう。……あの日、コハルさんたちは大きな罪喰いに襲われて、コハルさんは完全に罪喰い化してしまったの。番兵さんたちが騒いでたのに気が付いて、私が駆け付けた時にはもう、罪喰い化したコハルさんは飛び去っていて、かろうじて残っていたのは光に侵された3人だけだった」

「……番兵で護衛のトッデン、世話人のバーニル、そして……ハルリクね」

テスリーンはサラダをボウルによそいながら、アリゼーさんにも器を配ります。アリゼーさんは「ありがと」と言って、ジュースに口を付けました。流し目でテスリーンを見ると、横髪を掻き揚げてサラサラの長い髪が、耳の裏に畳まれていきます。

その横顔は美しく、まるで……仮面をつけているようでもありました。

「……どうして、もっと早くに気が付かなかったんだろう。いつどこで襲われるかなんて誰にも分からないけれど、それは……ここを旅立つ人の様に必ずその「いつか」はやってくる。そのくらい外は危険なのを分かっていたのにね」

「その為に、番兵や護衛が居るんでしょ？ あなたが一人で背負うことは無いわよ」

「ありがとう。でもね、こうも思うの。コハルさんは罪喰い化してしまったけれど、身を挺して3人を守ってくれたんじゃないかなって……。そのまま連鎖して3人とも連れていかれてもおかしくなかったんだもの。被害を最小限に抑えられたとは言えないけれど……もう二度と、あんな悲しいことは起こって欲しくないわ」

「……」

アリゼーさんはサラダを咀嚼しながら、テスリーンの言葉も咀嚼しています。

その表情は例えるならそう……かつて美味しいと感じていたものが、大人になって味覚が変わったのかもしれないと首をひねる様な、そんな仕草。

つまり、違和感……。サラダの中に魚は入っていなかったはずなのに、小骨が刺さったかのような、のど越しの悪さをアリゼーさんは感じていたのです。

それはかつての自分であれば嬉々として受け入れていたのでしょう。ただ今、アリゼーさんの目的を諳んじればこそ……。

しかし、アリゼーさん自身もまだその正体が何なのかを推し量ることは難しいようです。かつての世界では、空に散りばめた星々はあんなにも綺麗であったはずなのに、この世界ではその星の名前すらアリゼーさんは知らないのですから……。

「あ、ごめんごめん。暗くなっちゃったね。次はなに飲む？ 私は……ロークワットにしようかな。一回飲んでみたかったの」

「私はこっちにするわ。それより、ラモンのことなのだけど……」

「え？ アリゼーってああいうタイプが良いの？」

「違うってば！ いきなり何の話よ！」

花が咲きそうな所で、一先ずここは二人だけの時間にしてあげましょう。

それから二人は和気藹々と会話を続けたのでした。サラダも二人でべろりと平らげて、甘いジュースで乾杯なんて洒落込みながら、時間が過ぎていきました……。

しばらくして、食事会の片付けも大方終わりが見えた頃——。ラモンの姿が旅立ちの宿の出口に。最後の片づけをしながら、ハルリクの世話をするテスリーンを眺めています。

そこへ、アリゼーさんが静かな足音で近づいていくのが見えました。

「ごちそうさま、ラモン。素敵な食事会になったわ。ありがとう」

「ああ、アリゼーさん。旅人さんも、患者さんも、誰でも腹は空きます。なら、あっしはみんなの分の料理を作るだけですよ」

そう答えつつも、ラモンの視線の先にいるのはハルリク……の世話をするテスリーンでした。彼の瞳にはいつもテスリーンが映っています。その意味はアリゼーさんほど感受性の豊かな人なら察しがついているようでした。

内心はクスリとしつつも、表情は呆れたように流し目でラモンに問いかけます。

「……テスリーンの為、じゃないの？」

「え？ い、いやいやいやいや！ あっしは、あっしが作るのはみんなの為ですよ！ まあ、それは必然誰かの為でもあるんですが……はは、あははは！」

「素直じゃないのね、みんな」

おや、あなたの表情……ふふ、分かりますよ。

「アリゼーさんがそれを言う？、ですよ、ふふふ。」

「はは……まあ、ずいぶん落ち着いたんですよ。あれでも……」

「1年前は見てられませんでしたからね」

「1年前？」

「あ、聞いてませんか？ テスリーンのお母さん……アリエスさんも、光に侵されてここへやってきたんですが、テスリーンもその付き添って感じて一緒に来たんですよ」

「ああ、そのことなら聞いてるわ。1年前だったのね」

「ええ。元々あっしは、テスリーンと同郷なんてあの子が小さい頃から見知った仲でした。早くに母子家庭になってしまったんで、父親という存在をあまり意識せず育てた子なんです。だからお母さん子で、小さい頃はアリエスさんの小指を掴みながらいつもくっついて歩いていたんですよ」

「……小指」

「はい、テスリーンは左利きなんで、こう……こんな感じですね。だから、お母さんが光に侵された時どうしていいか分からなかったんですよ。あっしは一足先に故郷を出て、旅立ちの宿の炊事番をしてることは話してあったので、それであっしを頼ってこっちに来たんですよ」

「あら、意外と頼られてるじゃない？」

「はは……。でもここでよく面倒を見てくれたのは、皆の母コハルさんですよ。テスリーンもコハルさんにはよく懐いてました。アリエスさんが旅立って、表向きは最期を看取れて良かった…なんて気丈に言いますが、大分参っていたんですよ。それに追い打ちを掛けるように、あんな事件が起こったんですから……」

「あの、コハルが犠牲になったっていう事件のこと？」

「そうです。テスリーンの悲しみも癒えぬまま、時間が癒してくれるわけもなく……。世話人としてハルリクや、他の患者さんに尽くしてくれますが内心は……。時折り、どこかへふらっと出掛けていくんですよ……護衛もつけずに。あっしは危ないからと怒ったんですが、一向に辞めてくれません。まるで、二人の死を受け入れられないかのように、あっしには見えました」

「……何かを探してるって、カツサーナさんは言っていたわね」

「探し物、か……。まあ、アリゼーさんは歳も近そうなんで、テスリーンの良き友人になってくれたら嬉しいですよ」

「ええ、心配要らないわ。私テスリーンの用心棒を引き受けたから。また一人で危ないことをするようなら、私が止める」

「おお、そいつは良かった！ 今後ともテスリーンをお願いします！ それじゃあ、あっしは明日の仕込みがあるのでこれで！」

「ありがとう、色々聞けて良かったわ」

最後に賑やかな挨拶と、豪快な大手を振りながら去っていくラモン。

その後ろ姿を見送りつつ、ハルリクに話しかけているテスリーンを眺めるアリゼーさん。先ほど見えた左太ももの横にある懐剣を、思い出していました。

普段はワンピースの裾で隠れていて見えないけれど、ふとしたときに見せる煌めきは決して華やかとは言い難いですが、大切なものだろうことはアリゼーさんも気づいています。それはまるで、心を許した人にしか見せない特別な表情の様……。

その表情の奥には一体何が隠されているのでしょうか……。もう少し物語を読み進めて参りましょう。

その日の深夜——。といっても、夜は訪れないので人々が寝静まった時間帯。空は煌々とし、番兵の息遣いすら遠くの風にかき消えてしまう静けさの中、動く人影がありました。

テスリーンさんです。忍び足でエーテライトのわきを通ると、番兵の目を盗み旅立ちの宿を出ていってしまいました。

アリゼーさんもそれには気づいていて、ベッドから身体を起こして装備を整えます。ラモンとの会話が頭を過ぎりながら、危険でもなお探し物があるのなら、余程大切なものなのだろうとアリゼーさんは思い直し、テスリーンの後を追います。

荒廃した乾いた大地を歩くこと数分。テスリーンは足を止めて膝をつきました。

膝が汚れても、手から砂がこぼれても、一向に辞める気配はなく……一心不乱に探す様子は、ラモンの言葉が思い起こされるようでもありました。

アリゼーさんはその様子を見て、しばらくそのままにしてあげようという気持ちになってきました。周囲の警戒は怠らず、危険があればすぐにでも出ていくつもりで……。

そこに焦りや、怒りといった感情は湧いてきませんでした。

むしろ、小さくなったテスリーンの背中を見て、さすってあげたくなるような気さえしていたのです。しかしそれは、本当の意味でテスリーンへの優しさではないのかもしれないと思い、手は貸さず静かに見守るという選択をしたのかもしれない。

求める答えが大切であればこそ、誰かから与えられたものに納得は出来ません。自分自身で見つけて、納得出来なければ意味が無いのです。アリゼーさんは表情の見えないテスリーンの横顔を見ながら、寂寞たる姿をただただ見守っていました。

気が付けば半刻は過ぎていたでしょうか。いえ、四判刻ほど

でしょうか……。

テスリーンも、アリゼーさんも時間の経過を忘れるくらいその場で風に当てられていました。

幸い、罪喰いからの襲撃は無かったものの、これ以上の外出は控えた方が良く判断したアリゼーさんはテスリーンのもとに向かいました。

「っ……」

「今のが罪喰いだったらどうするの？ 出掛ける時は、私に一言くらい欲しかったわ」

「あ、アリゼー……ごめんなさい」

アリゼーさんは静かに歩み寄るのではなく、背の高い岩の上から見下ろしていたので意地悪にも、一足飛びでテスリーンの近くに飛び降りたのでした。テスリーンが驚くのも無理はありません。

「良いわ。私はあなたの用心棒よ、何があっても守ってみせるわ」

「……ありがとう」

「でも、もう一人で勝手に外出しないこと。何処に行くのでも付き合うから、必ず私に声を掛けること。いい？」

「ええ、約束する。……ごめんね」

「ほら、立って。帰るわよ」

「……アリゼーは、聞かないんだね」

「何を？」

「私が……ここに来た理由」

「……大切なものを、探してるんでしょ？ でもそれは、あなた自身が解決することで、私はそれを見守ることしか出来ないわ」

「そうだね……。私ね——」

「ストップ！ 一先ずここを離れましょ。せめて、旅立ちの宿の近くで番兵の目が届く場所まで行くわよ」

アリゼーさんは半ば強引に手を引いて、テスリーンを立ち上がらせると小走りに駆けていきました。

旅立ちの宿へ戻る間二人はずっと無言で、乾いた砂を踏むザクザクとした無機質な音しかしませんでした。その不規則に繰り返された足音はやがて静かになり、岩肌を目の前にして鳴り止みました。

温かさも冷たさも感じない砂の上に腰を下ろして、最初に見たナバスアレンの城を望むように遠くを眺めています。

「……私さ、覚悟は出来てるって思っていたんだけど、いざお母さんのその時が来たら怖くなっちゃったんだ。コハルさんが近くにいるくれたんだけど、お母さんが大好きだったカボチャのスープに毒が入ってるって思うと、今日のご飯だよって言ってテーブルに置く手が震えてた。一口食べて、眠るように静かに目を閉じたお母さんを見て、私は心の中でずっと謝ってたの」

「……うん」

「お母さん、お母さん……って泣きじゃくってた。昔に戻ったみたいに、お母さんの小指を握りしめて、ごめんなさい、ごめんなさい……って。すぐにお母さんは動かなくなっちゃった。でも私はそれが受け入れられなくて、やだ、やだよってずっと泣いていたの。そしたらコハルさんが来て、どうしたと思う……？」

「……」

「私がお母さんの小指を離さないから……ダガーナイフでお母さんの小指を切り落としたの。そして、タオルで包み込みながら……」

『たとえ心を蝕まれていても、光に侵されていても、大切な命……。この世界にあるもので、いらぬものなんてないの。あなたも、あなたのお母さんも、生まれてきてくれてありがとう……』

「私は安心して、その言葉を反芻していたわ。涙は止まらなかったけれど、ずっと……気持ちが軽くなったような気がした」

『だからこそ、最後はみんなの旅立ちを見送らなきゃいけないのよ。あなたの優しい気持ちを大切に。……私もいつそうなるか分からない。突然その時がやってくるかもしれない。その時は……躊躇わず私の胸を刺しなさい』

「……そうって、そのダガーナイフを私にくれたの。あなたはきっと良い世話人になるってね……。だからこれは、私にとって護身刀でありお守りなの」

テスリーンの左のふとももには、ワンピースの裾の奥に鞘が見え隠れしています。過去を回想するようにそれに手を添えて撫でるテスリーン。

その表情は哀しい記憶でありながら、温かい気持ちになれる複雑なものなのでしょう。

「コハルって……すごい人だったのね」

「うん、すごかったよ～。豪快で、温かくて、コハルさんは私にとって二人目のお母さんなの。そして……このピンキーリングは、世話人としてたくさんのお母さんのことを教えてくれたコハルお母さんとの約束……」

「約束……？」

「コハルお母さんの旅立ちを見送ること……それが私の恩返しだったから。そしてお母さんとコハルお母さんも、向こうで一緒に仲良くして欲しいから、このリングはお母さんに渡したいの」

そういったテスリーンは、自身を抱くようにお腹の辺りに手を添えました。抱きしめているようでもあり、手を添えているようでもあり、どこか安心した表情を見せるテスリーンを見やり、アリゼーさんはもう今日は切り上げようという提案をしました。

テスリーンを見送って安心したかのように思えたアリゼーさんの表情は、また複雑な色が見え隠れしていました。

「……分かったわ、全て。テスリーン、あなたは どうして……」

アリゼーさんは、少し寂しそうな表情をしました。寝床に消えていく後ろ姿を見送ると、一度目を閉じて深呼吸。薄く開かれた視線は、ポーチから取り出されたあの小指を見ていました。

荒涼とした砂地に落ちていた誰かの小指、旅立ちの宿に生きる人々、テスリーンを中心にして巡る過去と約束、二人の母親を繋ぐピンキーリング……。

この物語の果てに、一体アリゼーさんは何を見出したのでしょうか……。

さて、いよいよクライマックスです。

あなたへ贈る問いは、一つだけ……。

アリゼーさんが拾った小指は一体誰のものだったのでしょうか。

ここまでの物語で数々の星を散りばめました。それを線で繋ぎ、結んだ先に果たして答えは眠っているでしょう。

しかし、冒頭にも申し上げた通り、真実の中に小さな……ヒトカケラの嘘を置いておきました。この嘘を見事見破り、どうかあなたもこの物語の結末を結んでくださいね。

それでは、まもなくアリゼーさんによる答え合わせが始まります。どうぞ、お楽しみください……。

「……おはよう、テスリーン」

「おはよう、アリゼー。話ってなあに？」

「そうね……。まずは、私がここを訪れた理由を話さなきゃならないわ」

アリゼーさんは、ポーチから取り出したそれを自らの掌に乗せて、テスリーンに渡すような仕草で、目の前に掲げました。

「テスリーン、あなたは私に嘘を吐いたわよね……。すべては、この小指が教えてくれた」

「え……。アリゼー！ それって……！」

「この小指が誰のものなのかを話す前に、ちゃんと順を追って説明するわ。私はこの世界に来てアム・アレーンの地にやってきた時、この小指を拾ったの。持ち主は誰なのか、一体誰のものなのか……。本人はきっともうこの世にはいないかもしれない。だから、ただただ悲しい出来事があっただけなのか、それともこれの所有者がいるとしたら返してあげたい。そう思って、旅立ちの宿にやってきたわ」

「うん、そう言ってたね……。昨日話してくれた」

「それから私は番兵さんを初め、色んな人と話をしたわ。そして、誰か小指を失っていないかを探したの。食事会の提案はとても助かったわ、ありがとう。でも、小指を失っている人は見つけれなかった。ということは、やはり本人は他界していてココの人とは関係ないか、もしくはこの小指に縁ある人がいて、本人ではなく誰か所有者がいるか……。よね。初めは気づかなかったけど、カッサーナさんの話を思い出して分かったの。あなたの出掛ける理由……。それは、これを探すことだった」

「うん……」

「でも、どうしてあなたがこの小指を探しているのか分からなかった。それを見つける為には、あなたの過去を知る必要があったの。ラモンはあなたを好いているようだったから、色々話を聞かせてくれたわ。もちろん、あなた自身からもね。それでようやく輪郭が見えてきた。あなたが大切に思っている人も、この小指が大切な人のものだっていうことも。ここまでくると、あの事件ことを紐解かなきゃいけないんじゃないかって思ったの。あなたには辛い記憶でしょうけれど……」

「あの事件……」

「ここで私は違和感を覚えたの。ウィルフォートが話してくれた事件と、あなたが話してくれた事件は一見同じようで、決定的に違う部分があった。それは……。光に侵された人の人数。ウィルフォートは三人と言っていたわ。トッデン、バーニル、ハルリクの三人。コハルのことは犠牲者と言ったの。でもあなたは、コハルは罪喰い化して飛び去ってしまったって……。確かに犠牲者と言い換えることも出来るし、光に侵されたとも言い換えられる。だからその時は、消化不良だったけれど指摘はしなかったわ。しかし、あなたの過去を知った今、この小指が大切なものだったのだとすると……。この事件の輪郭がボヤけるのは不思議だと思ったのよ。あの事件は、テスリーンはもちろん、ここの人たちにとっても忘れられない苦い記憶になった。であるならば、記憶が曖昧なんてことは無いはずだから。……。ひょっとして、テスリーン。あなた、何かを隠したくて嘘を吐いたんじゃないかって……」

「……」

長い沈黙が二人を包み込みました。テスリーンは唇を噛み、俯いた横顔は前髪で隠れて表情を窺い知ることは出来ません。

アリゼーさんは、テスリーンの口から話してくれることを期待しましたが、まだ彼女の口や心は重たいようでした。

「でも、あなたが嘘を吐く理由が分からない……。私の推理はこうよ。あなたは本当は……。あの現場に居合わせたもしくは、間に合ったんじゃないの？ あ、ごめん。責めてる訳じゃないのよ。この小指も大切なものだから返すわ。コハルさんのものなんでしょう？ ただ、あなたが本当は何を見たのか知りたいの」

「……そう、だよね……」

テスリーンは大きく息を吸い込んで、ゆっくりと吐き出しました。それは意を決したというよりも、観念したという風に見て取れます。

「ふう……。私の用心棒は、とんだ名探偵さんなんだからなあ。大体あってるよ。もう殆ど。アリゼーがいうように、帰りが遅かったから不用心だと思ったけど番兵さんと一緒に迎えに行ったの、みんなのこと。そしたら、罪喰いに襲われてる所だった——」

「コハルさん！ みんな！」

「下がってろテスリーン！ こいつは大物だ！ こっちへ来るな！」

「トッデンさん！ でも一人じゃ……！」

「くッ……！ そこの新入り！ 手を貸せ！」

「お、俺……。実戦は初めてなんです！」

「ヒョったこと言ってんな！ お前だって理由があって番兵やっ

んだろ！ 守りたいモノを守れ！」

「は……。はいッ！」

「テスリーン！ コハルさんとハルリクを頼む！」

「バーニルさんは!？」

「すまねえ……。バーニルさんは光をまともにくらっちゃった。でも

まだ、生きてる！ でも、コハルさんは……」

「え……」

テスリーンの見つめる先には、膝をついてハルリクを抱きしめるように覆いかぶさっているコハルの姿がありました。

ハルリクは茫然自失したような虚ろな瞳で、コハルの肩越しから罪喰いを見つめています。駆け寄ったテスリーンは、ハルリクのうわ言を耳にしながらコハルの肩に手を置きました。

「お母さん……。お母、さん……」

「ハルリク……。コハルさん……？」

「……その声は、テスリーンだね？ ごめんね、もう、動けそうにない……。よ」

「嘘……。そんな……」

「よくお聞き……。テスリーン。私が、罪喰いになるのは時間の問題……。そう、なる前に……。一つお願いがあるの」

「な、なに……。？」

「そのナイフで、私の胸を……。貫いて」

「やだ……。やだよお……。だって約束したじゃん！ コハルさんの最期は私が見送るって！ でもそれは、世話人の務めに倣って旅立ちを見送る時だもん！ そんなこと、出来ないよ……。！」

「……聞いて、テスリーン。私は罪喰いになって、ハルリクやあなたの哀しむ顔を見たくないの。だから、お願い……。あなたにしかお願い出来ないのよ、テスリーン」

「コハル……。お母さん……」

テスリーンは太ももの懐剣を抜き、震える両手を柄を握りしめることで鎮めようとしてました。しかし、肩まで強張る恐怖を、母を貫く恐ろしさを、止めることなど出来ませんでした。

振り上げた両手を、握りしめた刀を振るわせながら一体何粒の涙を落したのでしょうか。

息は荒くなり、過呼吸になりながら、見開いている大きな目から落ちた涙はコハルの背中を哀しみで染めていきます。

「テスリーン！ 危ねえ伏せろ！」

トッデンの声と同時に、コハルはハルリクを突き飛ばしました。テスリーンは悲鳴を上げながら振り下ろし、コハルの胸を深く深く貫きました。

「あああああああああああツツツ！」

「……ありがとう。テスリーン……」

そのままコハルはテスリーンを抱きとめながら、後ろに倒れていきました。

罪喰いの一閃をかわしたのも束の間、向かってくる罪喰いをトッデンが間一髪のところで剣を受け止めます。

「くそッ! しっ……た……ッ！」

「トッデンさん! 目が! 血が！」

「額を掠っただけだ狼狽えるな! 今だ、新入り！」

「はあッ！」

急所を貫いた一撃は、罪喰いを無力化することに成功……。乾いた風が、この悲劇の終わりを予感させました。

「……出来たじゃねえか……新入り……」

「トッデンさん! トッデンさん、しっかり! 嘘だろ……」

「……お……母……さん、お母……」

「ハルリク……ごめんね……」

ハルリクがうわ言のように呟きながら、地べたを四つん這いで近づいてくるとコハルの小指を握りました。表情は虚ろで、感情の欠落した様子。テスリーンはコハルから抜いた懐剣をもう一度掴み、左手で握りしめました。

ハルリクの右手を包み込むように上から重ね、母の血が付いた切っ先を小指の付け根へと当てて……。

「……あなたも、私と同じなんだね……。ごめんね……ッ！」

「……そして私は、コハルさんの小指をね……」

「そう、だったの……」

「あ、でもね? 一つだけ違うの。アリゼーが見つけてくれたのは、コハルさんの小指じゃなくて私のお母さんのなの。あの事件の時、コハルさんの小指はハルリクが落としたのを拾ったけど、お母さんのは気が動転していた時にポーチから落ちちゃってたみたいで……。それに気が付いたのは心が落ち着いて、しばらく経ってからだった」

「……辛い記憶を、封印したかったの？」

「ううん、嘘ついてしまったのはごめん。私はコハルさんからもらった懐剣と、このピンキーリングに誓ったの。もしもコハルさんが光に侵されて、お母さんと同じことになってしまったら……。世話人として旅立ちを見送ろうって。でも実際はそんな生易しいものにはならなかった。コハルさんのお願いとはいえ、別の方法で看取ってしまった。それが……私自身、許せなかったのかなあずっと」

「でも、コハルはあなただからこそ、願したんじゃないかしら」

「うん、そうだよ。コハルさんの気持ちを、今なら受け入れられる気がするよ。ずっと供養してあげたかったんだけど、出来なかったお母さんと一緒に……。ようやく、二人を繋ぐことができたよ。……来て、アリゼー。あなたにも見届けて欲しいから」

「……ええ、行きましょう」

それから二人は、アリエスとコハルの供養をしました。そこには一緒にピンキーリングも添えられていました。テスリーンが選んだのは、手元供養。遺灰をアクセサリーに納め、肌に身に着けること……。

「……私にとって、お母さんは二人いるの。だからいつも、お母さんたちの声を聴いていたいから……」

両耳につけられたイヤリングには、二人の母の小指と、約束のピンキーリングが宿っています。長い髪がサラサラと風に遊ばれて靡くと、深くオサードブルーの涙のようなフォーレンのイヤリングがそこにはありました。

「ハルリクやトッデンさん、バーニルさんはもう罪喰い化を待つしかないけれど……私は世話人としてみんなの旅立ちを見送るよ。それが私の新しい、決意……。ハルリクは私に似ているから、同じ過ちを繰り返させたくないんだ。この世界で、いらぬものなんて……ないからね」

「そういえば、一緒に供養したリングってワードリングだったわよね。なんて文字が刻まれてたの？」

「それは……」

テスリーンはもう一度、荒野の冷たい風に髪を遊ばせて耳を掻き揚げました。

「Integral……この世界に、必要なもの」

「ブラボー! 今回も素敵な朗読でした。ありがとう、ハンナさん」

「……あなたには読後感に浸るということを学んでほしいです。私はスタンディングオベーションよりも、夜更かしして本を読んだ時に見上げる星の方が好きなんです」

「これはこれは、失礼しました。では、コーヒーを淹れさせますのでどうぞお席へ」

「ありがとう。……気に入って頂けましたか? また呼んで下さいね、冒険者さん」

ハンナは、リン……と足音を響かせながらもと居た席へと戻っていきました。そして、先ほど読んでいた本を開いて、また読書を再開するようです。

モーレンはスタッフからコーヒーを受け取ると、片方はハンナの方へ渡すよう指示し、自身が受け取ったものはどうやらあなたの分らしいですよ。

「お疲れさまでした。……どうぞ。読後の余韻を楽しみましょう。少し私の独り言に付き合ってくださいませんか? ああいや、巻末だと思ってください」

ハンナとは少し離れた席で、あなたとお話したいようですね。早速相席しましょう。読後感に浸るために……。

「さて、あなたに最初にした問いを覚えているでしょうか? ……そうです、ハンナさんの不思議な謎掛けのことです。ハンナさんは、この物語の中で真実の中に隠されたヒトカケラの嘘を落しました。それは何だったのか気づきましたか？」

どうでしょう? ひょっとしたらあなたはもう、作中でアリゼーがテスリーンの嘘を見抜き、解決したと思っているかもしれません。しかしモーレンは、あえて問うているのです。

今風に言えば、ミスリードや叙述トリックといった類のものですね。

それにどこまで、あなたが思案を巡らせていたのか……答え合わせと参りましょう。

「この物語には、ワイルドカードが存在します。ご存知でしょうか? 登場人物の誰かに、ある特別な役割を与えること、です。それは示す行動であったり、言葉であったり、個人の主観とは別の働きを持つものです。この物語のワイルドカードは、一体誰に配られていたのでしょうか……? その布石となるものを、一番最初にハンナさんは落としていましたね」



一度、ページを遡っても構いませんよ？ ゆっくり参りましょう、読後ですからコーヒブレイクの的に。あなたのペースで。

「そうですね…`アリゼーさんの、`という言い方をしました。つまり多くのおそらく、これから始まる物語は、アリゼーさんが記したものだと感じたはずです。しかし、言葉とは行間と文脈を読むものです。枕詞に、書き手の……`と言った上でアリゼーさんの、`と言ったのです。ここは文脈的には違和感があります。本来であれば、書き手はアリゼーさんですね、というのが自然だからです。ここで違和感を持ったかどうかで、本編の謎を紐解いていかなければなりませんでした」

どうやら、物語が始まる前に演出は始まっていたようですね。その後モーレンも増長して、アリゼーさんのイメージを強固なものにしたのですから、いやいや意地が悪いお人です。

「さて、オープニングにして分水嶺だったわけですが、最初の問いに戻りましょう。この物語のワイルドカードは一体誰だったのでしょか？ アリゼーさん……そうですね、確かに彼女は`拾った小指は誰のものかを探す、`という使命を持っていました。それによって、ストーリーは動いていきます。しかし……本当にそうでしょうか？ アリゼーさんの物語だと認識していたのなら、ワイルドカードはアリゼーさんだったでしょう。一つの真実が提示されたからです。けれど、ハンナさんが渡したワイルドカードは`嘘、`です。そのカードを託されたのは……もうお気づきではないですか？ そう、テスリーンです。彼女は先に真実を話しました。しかし、アリゼーさんが真を貫いたことで、さらに嘘を被せたのです。これによって真実は改変され、新たな真実が生まれたのです」

少し言い回しが分かりづらいでしょか。

真実は存在するでしょう、しかしそれが嘘ということになれば、たちまち別の答えが必要になります。しかしそれが、さらに`嘘、`だったなら……？ あなたが聞いた過去は、本当は存在していないかもしれません。

もう真実は手の届かない場所まで消えてしまうのです。

「しかしご安心ください。テスリーンがついた嘘は、悲劇があったあの日に関してのみです。つまり、他の言葉はすべて本当のこと……ということになります。この配合こそ、一番気づきにくい`嘘、`の紛れ込ませ方なのです。そしてハンナさんが言っていたヒトカケラの嘘が示すのもこの部分です。もし……もしもですよ？ テスリーンが最初に話したことが真実なのだとしたら、コハルは一体どこへ行ったのでしょうか……？ アム・アレーンを支配する大罪喰いの名はストルゲー。`家族愛、`を意味する言葉です。親愛こそ、この罪喰いが`喰らう罪、`だったのではないでしょか……。それ即ち、母性という我々男には遠く及ばない親なる愛を知る者でなければならなかったのですよ。相応しい名前でしょう。さて……、どちらが真実かという議論はもはや些末な事です」

だってほら、テスリーンが探していたのはアリエスの小指です。うっかり落としてしまったと……。本当はコハルの小指は存在しないのかもしれませんが。本当は切断しなかったのかもしれない。本当に罪喰い化して、飛び去ってしまったのかも……。

この物語は、ダブルミーニング。すべては猫箱の中……ということですね。今あなたの前に、二つの真実が提示されました。

どちらかが真実かもしれませんが、どちらも真実ではないのかもしれませんが。しかし、この物語は存在していた。あなたがアム・アレーンを訪れる少し前の出来事だったのです。

書き手がテスリーンであれ、アリゼーであれ、当事者たちが語ったのならそれは真実足りえてしまうのです。それが例え、家族愛の美しい物語でもあり、哀しい悲劇だったとしても……。

あなたは、そこに居なかったのですから……。

「どちらを信じるかは、あなたにお任せしますよ。ただどうか、誤解をしないでくださいね。ハンナさんが伝えたかったのは、真実を否定するものではなく、ひょっとしたらそんな世界もあったかもしれない……その思考の余地は、どの物語にも存在する。あなたにとっての真実は、あなたが決めて良いのです。それが彼女の……朗読する者の`愛、`なのですから」

モーレンは立ち上がりました。読後の余韻とやらは、楽しんでいただけたでしょうか。そんな短いようで濃厚な、コーヒが温かさを残している間だけの贅沢な時間をあなたにも感じて欲しかったのでしょ。

「そうそう、私テスリーンの最後のセリフ好きなんです。`インテグラル……この世界に、必要なもの、……。偉大なる書物たちは過去を知る遺産ですが、そこに行間はあつて良いと思うんですよ。だからハンナさんの朗読は一度聴いたらファンになってしまうんです。…では、私はこれで。良かったらまた、いらして下さいね」

そう言ってモーレンは、よく分からない球体の機械の前へと戻っていきました。

さて……。いかがだったでしょうか？ もう少し、読後の余韻——思考の余地——を楽しむのも良いでしょう。そのコーヒが温かい内は、思考の熱も冷めないでしょう。

そういえば、コーヒではないですがお茶が冷めないうちに読んで欲しい物語が、この博物陳列館にあるそうですよ。

【陽明りの奇跡は、海の灯】というタイトルです。

ぜひ探してみてくださいね。

それでは、また気が向いたときにでも思考の旅へいらして下さいね。

あなたのお越しを心よりお待ちしております。

*Hannah reading love... ..*



# あとがき

改めまして、Final Fantasy XIV新生6周年おめでとうございます！

皆さまごきげんよう。6周年も無事(?)脱稿出来ました。今回も6周年記念小話「母の小指と、約束の指輪」を最後までお読み頂きましてありがとうございます。もう2020!しかも2月!もう年度内ならいいかなという気になってきました。(ダメ)

私信です。紅蓮小話では幕間という立ち位置で執筆させて頂きましたが、さて漆黒はどんなテイストで行こうかと考えた所、漆黒秘話のテイストが全て前日譚になっていましたね。

サンクレッドの過去、エステニアンの過去、シドたちの過去(未来?)、エメトセルクの過去……。

めっちゃ好みのテイストでした!全部テンション上がりました!ありがとうございます。7周年の秘話も期待しています。

ではでは、私の立ち位置はどうしたかという、読んで頂いてお分かりの通り。アリゼーの前日譚にさせて頂きました。私が5.0のメインストーリーを読んでいる時に、最初に選んだのもアム・アレーンだったのですが、テスリーンが印象的過ぎて、最初からクライマックス過ぎてもう舞台は決まっているも同然でした。

しかしながら、漆黒のテイストにするにはもうひとつ何か変わり種が欲しいということで、世にも珍しい「二人称小説」にしてみました。

これは今回漆黒のメインで、アルバートが常に近くに居て語り部のように進行してくれた背景から、ピッタリなテイストなのではないかなと思っています。

そして、博物陳列館という宝庫もありますので物語としてはとても寄せやすい場所です。なので、舞台はアム・アレーンでありながら物語の始まりはモーレンさんに決定!

二人称にするならば、朗読者が脚色してくれたら面白そう……ということで、今回の「母の小指と、約束の指輪」と相成りました。

お楽しみ頂けたでしょうか?

文章表現の面白さと、小説的な楽しみ方を盛り込んでみたのですが、おや…?これはいつもと違うぞ?と思って頂けたなら嬉しいです。

これが一人称で、テスリーンなりアリゼーの視点で描かれた物語であれば、真実は一つだったでしょう。しかし今回は2人称でありハンナという朗読者が居たので、結び方は不思議なものになっていたと思います。

「小指」というなんとも奇怪なメタファーを据えて、ちょっぴりミステリーちっくな進行にしてみました。書いていてとても楽しかったです。

皆さんはどっちが好みですかね?やっぱり一人称が好きですか?

おそらく、普通に愛のあるお話で良かったじゃん!という方もいるでしょう。私も大好きです。

ただ、二次創作をされている方はみんな愛が無ければ書けないと思うので、そういった側面からも真実はひとつじゃあないんだよというメッセージも恐れながら入れさせて頂きました。

次回の7周年も同じテイストにする予定なので、漆黒の間はもうしばらくお付き合い頂ければ幸いです。

それでは最後に恒例の叫びを置いて筆を置くと致しましょう。

なっちゃんに届けー!この想いー!漆黒メインめっちゃ良かったです!織田さんも読んでくれてたらいいなあ……。

では、また7周年でお会いしましょう。

Ramuh鯖 Yuura.Erisell

## 【新生エオルゼア】

『[言行録](#)』

『[見聞録](#)』

『[近思録](#)』

## 【蒼天のイシュガルド】

『[蒼天秘話](#)』

2周年記念小話『[明かされなかった真実](#)』

3周年記念小話『[届けられなかった音義](#)』

## 【紅蓮のリベレーター】

『[紅蓮秘話](#)』

4周年記念小話『[始まりの狼煙は、紅い杯](#)』

5周年記念小話『[陽明りの奇跡は、海の灯](#)』

## 【漆黒のヴィランズ】

『[漆黒秘話](#)』

6周年記念小話『[母の小指と、約束の指輪](#)』

## 【Special Thanks】

[SQUARE ENIX](#)様

[FinalFantasyXIV](#)様

[FREE-LINE-DESIGN](#)様

And... You!!

[感想・連絡フォームはこちら](#)

この物語はFF14の二次創作物です。本編とは何ら関係はありません。しかし、スクウェア・エニックス様より申し立てがあった場合は即刻掲載を取り下げることをお約束致します。

記載されている会社名・製品名・システム名などは、各社の商標、または登録商標です。

Copyright (C) 2010 - 2019 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved.